



夏の学会と地球温暖化

神戸大学 経済経営研究所
准教授 後藤 将史

6 月から 7 月にかけて、欧州で二つの学会に参加した。その開催地は、一つはノルウェー（クリスチャンサン）、一つはフランス（ボルドー）だった。この 10 年ほど、ほぼ毎年海外学会に参加してきたが、その中で、ヨーロッパの夏が年々暑くなっていると感じる。特に Covid-19 以降、劇的な猛暑が 6 月から 8 月にかけて欧州全域を常に襲うようになったように思う。

実際に、ヨーロッパの夏はここ数十年で大きく変化しており、現在は世界平均の約 2 倍の速度で温暖化が進んでいるそうである。熱波の頻度と強度が増し、ヨーロッパは世界で最も温暖化が進む大陸の一つとなっている（と現地の経営学研究者も異口同音に言っていた）。最高気温の記録を見ると、1977 年にギリシャで観測された 48.0℃が長く欧州最高記録であったが、2020 年前後からはオランダ・ドイツ・スペインなどでも 40℃以上の最高気温が観測され、近年は極端な高温が繰り返し発生している。

地域差も大きい。北欧では絶対的な気温は南欧ほど高くないものの、本来は冷涼だった地域で 30℃超の熱波が長期間続くようになり、北極圏内でも高温が観測されている。今年は 6 月のノルウェー（アグデル大学）に滞在したが、最高気温は 25 度位で乾燥していて快適ではあるものの、長く日に当たるとやや暑く感じた。中央ヨーロッパでは気温上昇が特に顕著であり、西・中央ヨーロッパの夏季気温は世界平均を大きく上回る速度で上昇している。フランスやドイツでは 40℃前後の猛暑が珍しくなくなり、熱波が日常的な課題となっている。南欧・地中海沿岸は欧州で最も暑い地域であり、45℃超の高温に加え、干ばつや山火事の増加も深刻化している。将来的にも乾燥化と猛暑の進行が予測されている。要するに、ヨーロッパの夏は「南欧だけが少し暑い時代」から「北欧を含む全域で熱波が問題となる時代」へ移行しており、中央ヨーロッパでは急速な昇温、南欧では極端高温の記録更新が続いている。

このような変化は、学会を毎年夏に行う慣習にも問題を投げかけているように感じる。夏に学会を開催する際に、かつては日差しのある南欧が、日照時間の少ない寒い地域の研究者に人気だったかもしれない。しかし現実には、イタリア・フランス・ギリシャなどでは「暑すぎて研究発表に集中できない」という環境が生まれているように思う。

実際に、7 月初旬のボルドー大学での学会では、その前の週に同地で 40℃近い最高気温を

記録しており、滞在中も 30℃まで気温が上がった。よく、欧州は乾燥しているので日陰に入ればそれほど暑くないと言われる。それはある程度その通りなのだが、フランスなどは大学の教室にクーラーが無い。そのため教室に日差しがかかる時間帯になると、日本ではあまり体験しない「乾燥した高温をクーラーなしで耐える」という状態になる。これは熱中症リスクがおそらく想像以上に高く、集中して研究発表に臨めないように感じた。

また以前、2023 年 6 月にイタリア（モナッシュ大学）で学会に参加した際は、ちょうど豪雨で水害が発生していた状況もあり、現地が日本以上に蒸し暑く困惑した。日本ではまだ蝉が鳴いていない（梅雨の最中でそれほど暑くなっていない）時期だったが、イタリアでは至る所で蝉がうるさく鳴いていて驚いた記憶がある。

一方で、ヨーロッパ北部では気候が過ごしやすくなったように感じる地域もあった。2025 年 7 月にイギリスのオックスフォードに滞在した際は、20 年前には当然だった肌寒くて雨が多い夏から、晴れが多く（従来の）日本の 5 月のように毎日が快適で過ごしやすい気候に変化していて、逆に驚いた。

今後は、学会の開催地も、夏の南欧からより緯度の高い冷涼な場所へ人気シフトする可能性があると感じる。